

| | |
|-------------------|--|
| | 三重大学 農学分野 |
| 学部等の教育研究 組織の名称 | 生物資源学部（第1年次:240 第3年次:10） 大学院生物資源学研究科（M:88 D:12） |
| 沿 革 | <p>大正10（1921）年 三重高等農林学校設置</p> <p>昭和19（1944）年 三重高等農林学校を三重農林専門学校に改称</p> <p>昭和24（1949）年 新制三重大学設置（農学部）</p> <p>昭和41（1966）年 大学院農学研究科設置</p> <p>昭和47（1972）年 三重県立大学を移管し、水産学部設置</p> <p>昭和51（1976）年 大学院水産学研究科設置</p> <p>昭和62（1987）年 農学部及び水産学部改組により生物資源学部設置</p> <p>昭和63（1988）年 大学院農学研究科及び大学院水産学研究科を改組し、生物資源学研究科設置</p> <p>平成元（1989）年 大学院水産学研究科、大学院農学研究科廃止</p> <p>平成3（1991）年 大学院生物資源学研究科博士後期課程設置</p> <p>平成4（1992）年 水産学部廃止</p> <p>平成5（1993）年 農学部廃止</p> |
| 設置目的等 | <p>大正10年、三重大学生物資源学部の母体である三重高等農林学校が、農林及び農林土木に関する高等の学術技芸を教授することを目的に設置され、昭和19年、三重農林専門学校に改称された。</p> <p>昭和24年、広く教養を与えると共に専門の学芸を教授研究し科学及び技術の発達に努め真理と正義を愛する人格を育成し、人類の福祉と文化の進展に貢献することを目的として、三重大学が設置され、農学部が置かれた。</p> <p>昭和47年に三重県立大学を移管し、水産学部（水産学科）が設置された。</p> <p>昭和62年に農学部と水産学部を改組・統合し、生物資源学全般の基礎並びに総合知識を広く身につけた柔軟な応用力を発揮し得る人材を養成することを目的に、生物資源学部が設置された。</p> |
| 強みや特色、 社会的な役割 | <p>三重大学は、東海地域の豊かな自然と風土のもとで、食料の生産、生態環境の保全、生物資源の利用等、生命を支える農学を考究し、地域や社会の発展に寄与することを目指す教育、研究、社会貢献に取り組んでおり、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <p>○ 博士前期課程においては、食料生産、自然環境の保全と修復、人</p> |

類の自然との共生、バイオマスエネルギー、資源生物の生命機能の活用等、生物資源学にかかわる諸分野について高度な理論と技術を教育し、豊かな学識と幅広い視野を有する人材育成の役割を果たし、博士後期課程においては生物資源の開発、生物圏と環境の保全や修復、生産機能の応用等、生物資源学の理論・技術を究明し、高度な先端的専門能力と豊かな学識と幅広い視野を備えた人材育成の役割を果たす。

- 日本技術者教育認定機構（JABEE）認定プログラム、独立行政法人研究機関との連携大学院運営、海外大学とのダブル・ディグリープログラム、また、附属教育研究施設（農場、演習林、水産実験所、練習船）を活用した実践型カリキュラムにより、現代社会が抱える重要課題に正対する国際的教育機関として、実践的でリーダーシップを発揮できる人材を育成する学部・大学院を目指して不断の改善・充実を図る。
- アコヤガイの品種改良や天然リグニン誘導体（リグノフェノール）の高級活用法の開発等、地域並びに我が国の生物資源の持続的生産の発展に寄与してきたことを踏まえ、自然環境科学、生命科学、資源生産科学、地球環境工学、社会科学を基軸とした基礎、応用、開発研究を推進する。
- 企業向けオープンラボ、環境農林水産フォーラム等のシンポジウムや三重大学伊賀研究拠点事業、附属教育研究施設の地域活用等を積極的に展開し、地域社会に専門性の高い内容から幅広い先見的内容の情報・知識を提供する取組を推進して、地域社会が世界の急激な知識基盤社会化に対応できるように貢献する。
- 社会人向け「科目等履修制度」による有用資格取得支援、現代テーマを取り上げた学術性に優れた「生物資源学部特別支援プログラム」や市民開放講座を積極的に推進し、また大学院前期課程及び後期課程における「社会人特別選抜」等を通じて、社会人向けリカレント教育の役割を果たす。
- 公開講座、出前授業、高大連携事業（サマーセミナー、スーパーサイエンスハイスクール、サイエンスパートナーシッププログラム）等、各世代の教育に取組み、生物資源学の更なる発展の役割を果たす。